

「誇り・味方・居場所」  
—私の社会保障論—

誇り・味方・居場所  
私の社会保障論

大熊山紀子



大熊由紀子 著  
ライフサポート社  
税込1728円

著者の思いを凝縮させたら、変わった書名に行きついたようだ。朝日新聞の論説委員時代から、北欧視察を踏まえつつ福祉分野への政策提言を長く続けてきた著者の最近の心境を示している。要介護や認知症の高齢者にとって、「誇りと味方と居場所」の3つを失うことが、最も大きな問題だと訴える。

◆ ◆ ◆

ケアの提供者や政策立案者たちからの目線ではない。当事者からの言葉

だ。著者に3要素を確信させた決定的要因がこの数年の間に起きた。母親をその自宅で看取ったことだ。著者のすぐ近くに住む母親が末期がんと診断されて以来、母親宅に通い続け、地域の在宅サービスをフルに活用してきた。その5年間の体験記が実は本書の白眉である。

理想論を説くメディアや研究者たちに、「では、あなた自身はどうなの」と実践者から問われると言葉に詰まる御仁は多い。積み重ねた該博な知

## 書評

# 長年の政策提言を「母の看取り」で実践

識は「仕事」として発信するが、本当に身につけているかは別だからだ。



本書は3部構成。8年前に岩波書店が刊行した共著からの転載と毎日新聞で3年前まで約2年半書き続けた31本のコラム記事、それに自身の介護体験記である。

第3部の体験記は、書名の中身がどのように実現できたかを実にリアルに記している。福祉用具

の活用でオムツからトイレ利用への移行、テレビ番組の視聴法の工夫、ウィッグを付けて気に入りの和食店での外食……。とりわけ料理屋での御本人の笑顔の写真は印象的だ。

しれないが、第1部、2部を執筆している大家であり御意見番の生活である。読者の関心は高い。

そして介護体験記は、

机上の論説が見事に実現されていることを裏付けている。有言実行のお手本である。「母のマンションは、偶然、デンマークのケア付き共同住宅とよく似た間取りです」とあるが、在宅医療や在宅介護の関わりもデンマークに近付けた。

全200頁のうち、体験記がわずかに12頁では寂しい。この3部の標題を「わが母の地域包括ケア」としているだけに、もっともっと5年間の軌跡を知りたい。地域包括ケアのモデルになりそう

評・浅川澄一

ジャーナリスト

元日本経済新聞 編集委員

全国の介護家庭で営まれている悲喜こももものエピソードのひとつかも